

イマカナ [文化]



展示準備中の菅木志雄—いずれも横浜美術館

横浜美術館(横浜市西区)の開館30周年を記念し、約400点の所蔵品が並ぶ「Meet the Collection—アートと人と、美術館」展が開催中だ。全展示室を使った見応えのある展示で、同館の代表作を紹介すると同時に、ゲストアーティストが展示に関わることで所蔵品に新しい光を当てている。(下野 綾)

現代美術家が新たな光

横浜美術館開館30周年記念展

Meet the Collection

アートと人と、美術館

全体は、美術における生命や人の営みの表現に着目した「LIFE・生命のいとなみ」と、アートを芸術家による世界の縮図と捉えた「WORLD・世界の私たち」の2部構成。ゲストとして参加した現代美術家4人は、それぞれのテーマに沿って、所蔵品の中から展示する作品を選

び、所蔵されていない自作品と共に展示している。1960年代末に「もの派」を代表する作家として活動し、現在も第一線で活躍する菅木志雄(75)。「モノからはじめろ」をテーマに、物そのものに注目した展示空間を手掛けた。菅は物への認識に疑問を持つことで、自分の感覚を大事にするよう訴える。「これは木だ、石だ、と思う。それは頭の中にある記号性と結び付いているから。その結び付きを取り払い、本当にこれは木なのかと思いつつ見ている。そうすると、それぞれが感じること以外はない。僕はそのきつかけづくりを作品によって行っている」

20年前に同館で個展を行った菅は「横浜美術館は、ベースキャンフのような存在。閉鎖性のない空間が好きだ。他の美術館とは全く違う」とほほえみ、当時と同じ場所で同じインスタレーションを展示するまれな機会を喜ぶ。

玄関前に並ぶのは、丸太とアルミの棒を組み合わせたインスタレーション「散境端因」。20年ぶりの展示で、木の皮は変色し、ひびやゆがみも生じている。その時間の厚みが作品に表れ、新しい感覚を見る者にもたらず。「作品だけが独立しているのではなく、美術館と両方の空間が生きなければいけない。館の周囲の環境はだいたい変わり、昔と全く同じとはいえないが、僕の中では20年間ずっと続いてい



浅井裕介の壁画「いのちの木」

る意識がある」と話した。2009年に同館で個展を行った東芋(43)は、女性の情念に着目した映像インスタレーションを、鎌木清方や小倉遊亀らによる女性を描いた日本画と展示。12年に神奈川文化賞未来賞を受賞した浅井裕介(38)は、円形の展示室に「いにしへの巨大な壁画「いのちの木」を制作。壁画の上に、長谷川潔や武井武雄らが描いた動植物の作品が並ぶ。

インドネシア在住の今津景(38)は、名画や古代彫刻などの画像をデジタル加工し、それを元に油彩を塗り、今津の作品の前に並ぶタリやキリコらの彫刻は、画面から飛び出してきたようなイメージをもたらす。松永真太郎主任学芸員は「学芸員が思いもしない、アーティストならではの気付きがあつて楽しめる」と話した。

上千円。土曜は高校生以下無料。神奈川新聞社などの主催。問い合わせは同館☎045(221)0300。

国	作家	執筆者	文献タイトル	媒体名	発行日	頁	発行元	展覧会名
J	菅木志雄		現代美術家が新たな光	神奈川新聞	2019年4月22日	p.12		